

「うたつかい」終刊 佐藤博之

嶋田さくらを中心として十年もの長きに亘って発行されてきた「うたつかい」が九月に最終号を発行した。「うたつかい」は投稿者の歌を中心に掲載する歌誌で、誰でも自由に参加できることを魅力に多くの読者と投稿者を獲得していた。Twitterを中心とする拡散・広報と、投稿者への配布と文学フリーマーケットに於ける頒布が中心ということもあり、一般的な歌誌とは少し異なる歌誌であった。同じく今年終刊した「あみもの」(御殿山みなみ発行)とともに、所属を持たない歌人が気軽に無選で参加できる場であり、また短歌を始めたばかりの方も実績を積んだ方も平等に参加できる場ということで、各号百人を超える多くの若い歌人を集める「うたつかい」の果たした役割は大きかった。

「うたつかい」最終号から気になる歌を以下に挙げる。

・サボテンの花を食べたという人のブログを読んで、あなたの寝顔
さくらこ「うたつかい」37号

・かなしくないふりがじょうずになったこと知ってるでしょう、
「おいで」と呼んで 千原こはぎ 同

・新しい庁舎に人がいなくても水が流れるトイレ・かわ・うみ
牛 隆佑 同

・リキュールに染められてゆく牛乳のそれはしづかな抵抗でした

門脇 篤史 同

・散つてなお僕をさくら色に染めてこれがあなたのさよならです
か 高木 一由 同

門脇作、杳冠のように五首連作の歌の最初の文字を並べると「ありがとう」、最後の文字を並べると「うたつかい」となるメツセージが込められる。高木作、歌中の「さくら色」に編集長嶋田さくらこの名を込める。この号には門脇や高木と同じく「うたつかい」の終刊を惜しみ、感謝を込める歌も多く見られた。

Webマガジン「TANKANESS」の中で嶋田は終刊の理由について、「うたつかい」を作るために編集部の仕事やライターへの執筆などの無償協力に自分として甘えきれなくなったこと、色々な歌誌や同人誌を知ってきた上で自分の読みたいものを作るとなると自分の力ではまとめきれなくなったことを挙げている。嶋田自身は新たな同人誌の発起人の一人になったことや、後を継ぐように編集の一人であった千原こはぎが「うたそら」という無選歌投稿の歌を中心とした短歌誌を創刊したことも含め、この終刊は後ろ向きなことではなく、一つの区切りとして新しく踏み出していくための前向きな決断だと思いたい。

「うたつかい」や、先述の「あみもの」「うたそら」は、結社にとらわれない歌人の繋がりがりだけの話ではなく、短歌を始める方、特に若い歌人の広い受け皿となってきたことよって現代の短歌クラスタに於ける大きな貢献をしてきた。これら各誌の功績や支持される要素に目を向けるとともに、これまで短歌結社や既存の超結社組織がなし得なかったそれらの実績を鑑として、時代に即した門戸の開き方を模索していく必要があるのではなからうか。

「うたつかい」ホームページ：<http://utatsukai.com/>